

中国語 L1 日本語学習者によるテイル形産出のマルチモーダルな分析
—学習者コーパス「I-JAS」に基づいて—

石田 智裕

**A Multi-Modal Study on the Production of Tei-ru Form by Chinese L1 Japanese Learners
—Based on a Learners corpus I-JAS—**

ISHIDA Tomohiro

Abstract

This paper introduces data on the production of the *te-iru* form by Japanese native speakers and Chinese L1 Japanese learners which was collected from the I-JAS learner corpus. The results show that production of the *te-iru* form in both storytelling and story writing tasks in I-JAS was greater for native speakers than learners. In terms of lexical aspect, production of the *te-iru* form in the progressive aspect and perfect aspect was not significantly different between learners and native speakers. However, there was a difference in the production of the word "*aite-iru*". When native speakers use the *te-iru* form in conjunctions in compound sentences, they use various conjunctions, whereas learners tend to use "*te-iru toki*" more often than native speakers. Since these usage characteristics are possibly influenced by their native language, it is hoped that the results of this paper will be used in contrastive studies and in the development of teaching methods.



目次

1. 研究背景

1.1. テイル形の2つの機能

1.2. I-JAS の特徴：同タスク同量のデータ

1.3. 研究課題

2. 先行研究

2.1. テイル形の機能

2.2. 日本語学習者のテイル形習得

2.3. 本章の結論

3. I-JAS ストーリーテリング・ライティングにおけるテイル形の産出の量的な分析

3.1. I-JAS ストーリーテリング・ライティングの概観

3.2. I-JAS ストーリータスクのテイル形使用

3.2.1. ストーリーテリングのテイル形産出

3.2.2. ストーリーライティングのテイル形産出

3.3. 本章の結論

4. I-JAS から見る日本語母語話者と中国語 L1 日本語学習者の差異

4.1. 動詞の語彙的アスペクト

4.2. 「テイル形+と」の使用傾向

4.3. 「テイル形+時空間を表す語句」の使用

5. 結論

5.1. 結論

5.2. 今後の課題

5.2.1. 他の言語を母語とする日本語学習者との比較

5.2.2. 日本語教育への応用

1. 研究背景

1.1. テイル形の2つの機能

テイル形とは、動詞テ形に「イル」を後接させた日本語動詞の一形態である。一般に、アスペクト標識の機能を持つとされ、動作継続を表すテイル形と、結果状態を表すテイル形に分けて議論されることが多い。

1. 彼は今ご飯を食べている。

2. 彼はもう北京に行っている。

例文1は、正に継続している事象に関する描写であり、動作継続と解釈できる。一方で、例文2は「行く」という過去に発生した動作についての描写である。「彼はもう北京に行った」との差異は微妙ではあるが、その動作の効力が現在まで残存していることが含意される。

継続と結果という2つの機能を1つの形態で担っていることは、日本語の特徴の1つと言ってもよい (Li & Shirai 2000: 130)。

本研究の対象とする中国語と対照して考えてみる

と、中国語では動作継続・結果状態を表すには介詞や助詞を付加する必要がある、それぞれが使い分けられている。動作継続には主に“在”と“着”のような介詞や助詞が用いられるのに対し、結果状態を表す場合には主に助詞の“了”が用いられる。これらの機能語がどのような動詞に付加できるかについても、語彙的アスペクトの制約がある。例えば、石毓智 (1992) では、中国語の代表的なアスペクト助詞である“了”・“着”について、“了”は「その語の代表する事象の実現過程が含意される過程が含意される場合」に限り使用できる一方、“着”は「その語句が代表する事象がある程度の時間持続できる場合」にしか付属できないという制約があると論じられている (p. 184-185)。沈家煊 (1995) においては、有界的な事象については“了”が使用できる一方、“着”や“在”のような事象の継続を表す語句が使えなくなる例が挙げられている (p. 372)。このように、中国語においては、言語使用において動作継続と結果状態を表す標識は分かれており、どのような場面で生起できるかについても、動詞の語彙的アスペクトや事象の性質という制約がある。

それに対して、日本語のテイル形は、語彙的アスペクトとは関係なくほとんどの動詞に付加できる。例え

ば金田一 ([1950]1976) においては、「机がある」「吾輩は猫である」の「ある」、「英語の会話が出来る」の「出来る」のように状態動詞と分類される限られた動詞を除いて、他の動詞はテイル形を取ることが出来ると指摘されている (p. 7-9)。

中国語においては、「動作継続」「結果状態」のマーカ―は個別に存在している一方、日本語ではテイル形がどちらでも使用でき、動詞の語彙的アスペクトの制約も少ない。日本語を学習する中国語母語話者にとって、一対一で対応する標識を持たないテイル形の習得は困難であることが予想される。実際に、後述するように、教育上においても、しばしばテイル形・特に結果状態用法の習得困難さが指摘されてきた。

しかしながら、既存の研究においてはどうしても日本語母語話者の産出した日本語との定量的な比較が難しく、必ずしも「同じタスクで同じ量の」データを取っていたとは言い難いという方法論上の問題点が存在していた。即ち、母語話者の産出と学習者の産出を同条件で定量的に比較することができていなかったのである。

1.2. I-JAS の特徴：同タスク同量のデータ

「I-JAS (多言語母語の日本語学習者横断コーパス : <<https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas>>, (2020/8/23 閲覧))」は、国立国語研究所において開発された大規模学習者コーパスである。スピーキング・ライティングの双方について、日本語母語話者・外国語母語学習者のデータを「同じタスク・同じ量」収集したことで、母語話者の日本語・学習者の日本語の特徴を定量的に比較できる。

本稿では I-JAS の絵描写 (5 コマ漫画を見て、その内容を時系列順に描写する) のタスクの内、ストーリーテリング (口頭でストーリーを説明する) 及び、ストーリーライティング (文章でストーリーを説明する) におけるテイル形産出を題材として考察する。

1.3. 研究課題

本稿の研究課題 (Research Question) は以下である。

- RQ1. I-JAS のストーリータスクにおける中国語話者のテイル形使用にはどのような特徴があるか。
- RQ2. I-JAS における中国語話者のテイル形使用には、母語の転移と考えられる現象が見られるか。

2. 先行研究

2.1. テイル形の機能

テイル形は、日本語動詞テイルに「イル」を後接させた形態である。テイル形には、大別して2種類の用法がある。例えば寺村 (1984) では、テイル形は一般的に「動作や現象が継続していることを表す場合」と「ある過去 (以前) のできごとが終わってその結果が今ある状態として残っていることを表す場合」に分けられるとしている (p. 125)。工藤 (1995) では、上記を「継続性」と「パーフェクト」との呼称で区別している (p. 119-120)。

一般に、テイル形はある事象が継続していること・ある事象の結果が残存した状態にあることを表すとされていることがわかる。本稿では、「動作継続」と「結果状態」と呼称する。

2.2. 日本語学習者のテイル形習得

習得研究においては、テイル形の習得について、一般に「結果状態」表現のテイル形の方が習得が難しいとされている。孫等 (2010) では、結果状態のテイル形は学年が上がっても習得が困難であることが指摘され、総合的な語彙・文法習得がかなり進まなければ、結果状態のテイル形の習得も困難なままであることが指摘された (p. 57)。

スピーキングとライティングの双方について、コントロールされたタスクについてまとめた量のデータを扱ったものは極めて少ない。その中で、I-JAS を扱った峰 (2019) は、複文における結果状態のテイル形について、「**超級学習者であっても習得が困難である**」ことを指摘していたうえで、I-JAS のストーリーテリングタスクを用いて分析を行い、日本語学習者のテイル形+接尾辞の使用について、日本語母語話者は「テイル+と」を中心的に用いるのに対して、学習者は「テイル+時」を選択する傾向があることを指摘している (p. 66)。望月等 (2020) は、I-JAS のストーリーライティングタスクを使用し、「テイル+接尾辞」について、日本語母語話者は「テイル+と」を使用する傾向が強い一方、中国語・ベトナム語の母語話者は「テイル+時」を好んで使用する一方で、「テイル+と」を使わない傾向が指摘されている。(p. 145)

2.3. 本章の結論

これまでの先行研究では、日本語母語話者と中国語 L1 日本語学習者に同量・同内容のタスクを課すことができなかった。I-JAS の公開以降は、外国語母語話者と日本語母語話者のテイル形使用を定量的に見ることができるようになっている。

しかしながら、現状では日本語母語話者、中国語 L1 日本語学習者のテイル形使用に対象を絞り、網羅的にデータを分析したものは現れていない。その点で、I-JAS における日本語母語話者と中国語 L1 日本語学習者のテイル形を網羅的に記述し、分析することが、次の研究を進めるうえで必要である。

3. I-JAS ストーリーテリング・ライティングにおけるテイル形の産出の量的な分析

3.1. I-JAS ストーリーテリング・ライティングの概観

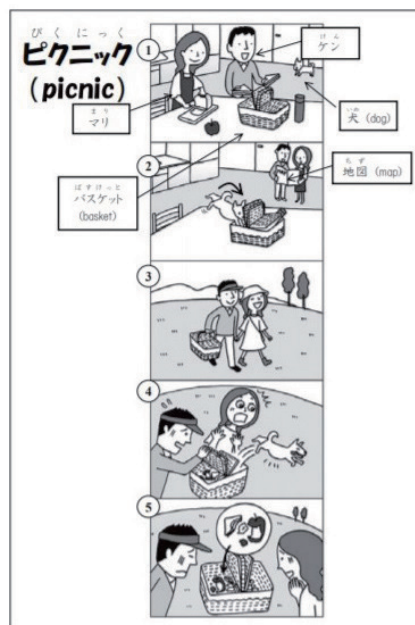


図1 「ピクニックタスク」5コマ漫画

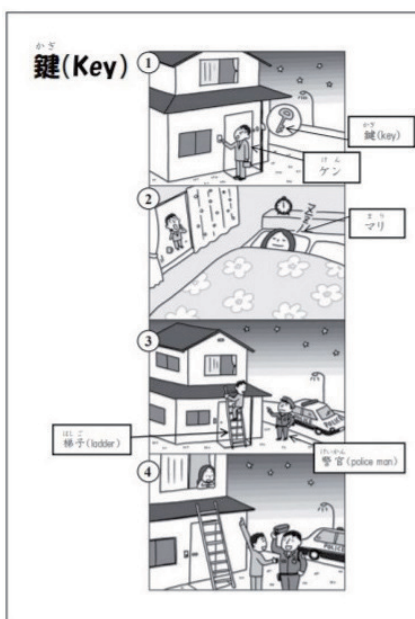


図2 「警察タスク」5コマ漫画

(図1、2ともに迫田等 2016 p. 100)

I-JASのストーリーテリング・ライティングにおいては、上掲の5コマ漫画を被験者に提示し、何が起きているのかを描写させる。ストーリーテリングでは、出題者の指示の後で、口頭で説明する。一方、ストーリーライティングでは文章で説明するという差異がある。

上掲の画像のピクニックの漫画（イラスト1）を使用するものがST1（Story Telling 1）、SW1（Story Writing1）、警察の漫画を使用するものがST2（Story Telling2）、SW2（Story Writing2）とされている。

全体に、I-JASではそれぞれの言語の母語毎に50人のサンプルが収録されている。一方で、中国語母語話者に関しては学習者の多さを反映してか、大陸中国の教室で学習する学習者が100人、台湾の教室で学習する学習者が100人、日本国内で学習する学習者が50人の総計250人のデータが集められている。そのため、他の言語の話者に比べれば、サンプル数が多くなっており、より母集団（中国語L1日本語学習者全体）の傾向を反映していることが期待される。

3.2. I-JASストーリータスクのテイル形使用

以下、それぞれの学習者のテイル形使用を表にまとめる。学習者IDは、JJJ = 日本語母語話者、CCH, CCMはそれぞれ大陸中国の教室環境で学習する学習者であり、データが収集された時期が異なる。CCS, CCTはそれぞれ台湾の教室環境で学習する学習者であり、こちらもデータが収集された時期が異なる。JJCは日本国内で日本語を学習している中国語L1日本語学習者である。それぞれの属性ごとに、データの数は50用意されている。そのため、日本語母語話者のデータ50×2ファイルに対し、非母語話者のデータは250×2ファイルあることになる。

それぞれの文字数は以下である（学習者番号を除く）。

table 1 I-JAS ストーリータスク全体文字数

	ST1	ST2	SW1	SW2
JJJ	35,758	42,422	29,041	29,371
CCH	58,283	59,305	28,036	25,804
CCM	49,271	52,783	26,213	26,929
CCS	46,402	46,408	32,015	28,655
CCT	43,996	43,040	31,546	28,123
JJC	44,228	47,176	25,362	25,642

以下は、日本語母語話者と中国語L1日本語学習者のストーリーテリングタスクにおけるテイル形の単純な使用数の集計及び10,000語当たりの調整頻度数である。なお、短縮形の「Vてる」も含む。

また、文字数はテキストファイル内の学習者番号および試験者の発話を機械的に取り除いたうえで集計している。頻度調査には語数を用いるのが一般的だが、学習者の産出した日本語は母語話者とは違った形態になることも多く、一般的な形態素解析によって語単位に分割することができないため、本稿では文字数を基準とする。

3.2.1. ストーリーテリングのテイル形産出

table 2 日本語母語話者・ストーリーテリング

JJJ	テイル形出現数
ST1	55
ST2	41
総計	96
頻度 (/10,000 語)	12.27

table 3 大陸・教室環境・ストーリーテリング

CCH, CCM	テイル形出現数
CCH-ST1	28
CCH-ST2	18
CCH 小計	46
CCM-ST1	21
CCM-ST2	30
CCM 小計	51
総 計	97
頻度 (/10,000 語)	4.41

table 4 台湾・教室環境・ストーリーテリング

CCS, CCT	テイル形出現数
CCS-ST1	28
CCS-ST2	42
CCS 小計	70
CCT-ST1	18
CCT-ST2	14
CCT 小計	32
総 計	102
頻度 (/10,000 語)	5.67

table 5 日本国内・ストーリーテリング

JJC	テイル形出現数
ST1	13
ST2	16
総計	29
頻度 (/10,000 語)	3.17

table 6 ストーリーテリング総計

	日本語 L1	中国語 L1
総計	96	228
頻度 (/10,000) 語	12.27	4.64

単純な集計だけで言えば、全体に、日本語母語話者の使用頻度は中国語 L1 日本語学習者に比べて多いと言える。10,000 語あたりの調整頻度で見ても、日本語母語話者に比べて、中国語 L1 日本語学習者の使用頻度は低いことが見て取れる。

ストーリーテリングの量的な調査から伺えるのは、テイル形の使用の量は、日本語母語話者の方が多いということである。

中国語 L1 日本語学習者のテイル形の産出は、10,000 語あたりの調整頻度で見ただけの場合には日本語母語話者の約 1/3 となり、少ない傾向が見て取れる。

日本語母語話者に比べて使用頻度が少ないという点では、中国語を母語とするグループのうちで、大陸の学習者であっても、台湾の学習者であっても差異はない。また、日本において学習している学習者は、むしろ国外で学習している学習者よりも使用頻度が少なくなっている。

むろん、サンプル数が多いわけではなく、「中国語を母語とする、日本語を学んでいる学習者」を母集団と考えた場合には、その特徴をどこまで正確に反映しているのかは疑問が残る。とはいえ、中国語 L1 日本語学習者は、少なくとも I-JAS のストーリーテリングにおいては、日本語母語話者に比べて、テイル形の使用頻度が少ないということが見て取れるだろう。

3.2.2. ストーリーライティングのテイル形産出

続いて、ストーリーライティングにおけるテイル形の産出傾向について、単純産出数及び10,000語当たりの調整頻度の両面から集計することを試みる。総語数は、学習者番号を除いている。

ストーリーライティングのタスクにおいても、単純な集計・10,000語当たりの調整頻度共に、日本語母語話者が中国語L1日本語学習者を上回っているという結果が見て取れる。

table 7 日本語母語・ストーリーライティング

JJJ	テイル形出現数
SW1	49
SW2	63
総計	112
頻度 (/10,000語)	19.17

table 8 大陸・教室環境・ストーリーライティング

大陸・教室 (100人)	テイル形出現数
CCH-SW1	20
CCH-SW2	16
CCH小計	36
CCM-SW1	18
CCM-SW2	22
CCM小計	40
総計	76
頻度 (/10,000語)	7.10

table 9 台湾・教室環境・ストーリーライティング

台湾・教室 (100人)	テイル形出現数
CCS-SW1	46
CCS-SW2	38
CCS小計	84
CCT-SW1	31
CCT-SW2	25
CCT小計	57
総計	141
頻度 (/10,000語)	12.38

table 10 日本国内・ストーリーライティング

国内環境 (50人)	テイル形出現数
SW1	28
SW2	48
総計	76
頻度 (/10,000語)	14.90

table 11 ストーリーライティング総計

	日本語L1	中国語L1
総計	112	293
頻度 (/10,000語)	19.17	10.52

ストーリーライティングにおいては、学習者と母語話者の10,000語当たりの使用数は2倍程度の差に縮まっている。とはいえ、日本語母語話者のテイル形使

用数は、中国語 L1 日本語学習者より多く、10,000 語当たりの調整頻度で見ても、日本語母語話者の産出数は中国語 L1 日本語学習者を超えている。

テイル形の使用頻度が日本語母語話者を下回っているという点では、学習者の属性を問わない。大陸中国・台湾のいずれかの教室環境で学習している場合でも、日本語母語話者に比べるとテイル形の産出の頻度は少ないことがわかる。

3.3. 本章の結論

I-JAS のストーリーテリング・ライティングの量的な検討の結果、いずれのタスクも日本語母語話者と中国語 L1 日本語学習者では、テイル形の産出量に差異があることが明らかになった。日本語母語話者は、中国語 L1 日本語学習者の 2~3 倍程度のテイル形を使用し、10,000 語当たりの調整頻度では、日本語母語話者テイル形を多用している実態が明らかになった。これは、テイル形を学習者にとっての習得困難点と見做してきた先行研究と符合する結果であるといえる。

4. I-JAS から見る日本語母語話者と中国語 L1 日本語学習者の差異

4.1. 動詞の語彙的アスペクト

多くの先行研究において、テイル形は動詞の語彙的アスペクトによって「動作継続」と「結果状態」に分けられている。また、習得に際しては、動作継続用法は習得しやすいものの、結果状態を表すテイル形は習得がむずかしいことが指摘されている。では、I-JAS ではどうだろうか。

I-JAS のストーリーテリング・ストーリーライティングにおける、中国語 L1 日本語学習者と日本語母語話者の産出状況は以下である。

table 12 ストーリーテリングにおけるテイル形の語彙的アスペクト

ST	動作継続	結果状態
JJJ	57	28
CCH	33	13
CCM	33	18
CCS	48	22
CCT	21	11
JJC	22	10

table 13 ストーリーライティングにおけるテイル形の語彙的アスペクト

SW	動作継続	結果状態
JJJ	76	36
CCH	24	12
CCM	35	5
CCS	47	37
CCT	41	15
JJC	51	25

日本語を母語とする参加者は、ストーリーテリング・ストーリーライティングいずれでも、動作継続と結果状態のテイル形がおおむね 2:1 の割合になっている。

学習者のデータを見ると、ストーリーライティングの CCM のような例もあるが、他のサンプルでは数値上は際立って習得に差があるとは言えない。

結果状態用法のうち、最も頻繁に使用されたのは「寝ている」である。絵タスク 2 のマリが寝ている場面を描写するために用いられている。「寝ている」は日本語母語話者のグループにおいて、ストーリーテリング・

ライティング併せて24例使われた一方、中国の教室環境学習者のグループでは100名の産出データの中で76例の使用が確認できる。台湾の教室環境学習者の場合は、100名の産出データ中で75例の使用が確認できる。日本で学習する学習者は50人中29例で、日本語母語話者と大差がない。

一方で、日本語母語話者の使用した結果状態用法の中で2番目に多かった「開いている(タスク1のバスケット、タスク2の窓の描写に使用)」については、日本語母語話者は20例の産出があったのに対して、大陸中国の教室環境学習者は2例・台湾の教室環境学習者は7例、日本で学習する学習者は0例という結果になっている。

日本語母語話者の中で3番目に使用数が多かった「入っている(犬が入っているバスケットを指す際に使われる)」では、日本語母語話者11例に対して、中国の学習者6例・台湾の学習者12例・日本国内の学習者6例となっている。

「寝ている」は必ずしも単純な結果状態用法だとは言えない。「入眠する」瞬間を指して「寝る」と考えることもできる一方で、「眠った状態である」ことを「寝る」と解釈することもできるからだ。これは、姿勢を表す一部の動詞、例えば「座る」などに近いと筆者は考えている。

中国語の影響から考えると、原因は中国語の継続アスペクトを表す“在”との混同があり得る。仮に学習者がテイル形を動作継続のアスペクト機能のみを持つと考えている場合、“在”と直接的に結び付けて習得している可能性がある。単純な形式面の対応から言えば「寝ている」には“在(睡覺)”、「(バスケットに)入っている」には“在(籃子)裡”が使えると言える。しかしながら、後者の“在(籃子)裡”の“在”は存在を表す用法であり、動詞のアスペクト標識としての“在”に対応するものではない。テイル形のアスペクト機能と“在”のアスペクト機能を対応させているというよりも、テイル形と“在”を表面的に対応させ、“在”が使えるならテイル形も使えるものだと理解している可能性がある。一方で、「(窓が)開いている」には

“* 窓戸在開”とすることはできない。中国語の完了アスペクトを表す助詞である“了”を付加させ、“窓戸開_了”とする必要がある。

とはいえ、継続のアスペクト機能を持つ助詞である“着”を用いて、“窓戸開_着”とすることもできるため、「継続という概念と窓が開いているという概念が結びつかないためテイル形が使えない」のかどうかはまだ疑問が残る。本稿においては、“在”を付けられない動詞である“開”に対応する「開く」のテイル形産出は少なかったことを指摘するにとどめ、原因の考察については別稿に譲る。

4.2. 「テイル形+と」の使用傾向

テイル形の用法の1つとして、「テイル形+と」の形で、ある動作が発生する背景を表すことができるというものが存在している。

I-JASにおける日本語母語話者と中国語L1日本語学習者のテイル形産出の差異の1つに、この「テイル形+と」の産出量が上げられる。

3. ピクニックに一行く一行き先を地図で調べていると、知らないうちに、えー犬が、その(連体詞)、サンドイッチを入れた(入れた)バスケットの中に入っていました(JJ51-ST1)
4. 今日の行き先を、二人で、地図で確認していると、え、犬がバスケットに入ってしまった(JJ57-ST1)
5. ケンはこの一な納屋から梯子を持って来て二階にあ二階に上がって一、す二階の窓から入ろうとしているとお巡りさんがやってきました(JJ10-ST2)
6. ケンとマリが地図を見てみると、バスケットに犬が飛びこみました。(JJ12-SW1)

7. しかし、ピクニックに行く場所を確認するためにケンとマリが一緒に地図を見ていると、二人が飼っている犬がバスケットの近くにやってきて、中に入ってしまった。(JJJ21-SW1)
8. そこで二階の窓から家に入ろうと、梯子を使って登っていると、警官に呼び止められました。(JJJ01-SW2)

上掲の例文を見ると、「テイル形+と」の形で、後続の事象が発生する前に、どんな状態であったかを描写していると考えられる。このような「テイル形+と」の使用が、日本語母語話者では、全体の 100 ファイルの中で、ストーリーテリングで 10 件・ストーリーライティングで 19 件見られる。

一方、中国語 L1 日本語学習者の場合には、この「テイル形+と」の形はほとんど産出されていない。500 件のファイルをすべて合わせても、ストーリーテリングでは 5 例、ストーリーライティングでは 1 例しか見受けられない。その 6 例の中でも、日本語母語話者と同じく「動作の背景や前後関係を表す」用法で使われているとはっきりわかるのは、以下の 2 例のみである。

9. えー、そすて（そして）、ケンさんは、じゃあ梯子を、上っ、て入れればいいと思う、時はー、けい、警官が、「あなた、何（なに）をしている」と、尋ねていると、えっとー、ケンさんは「あーそれは私の奥さん」とー、窓のそばの、えっとマリさんを、指している、ています（指しています）(CCS30-ST2)
10. そして、バスケットの中へ見ていると、サンドイッチとりんごも犬に食べられてぼろぼろになってしまいました (CCS26-SW1)

上記の 2 例は、後に続く描写の起こった状況の描写として、「テイル形+と」を適切に使用した例であると言える。

一方で、以下の 3 例については、発話者自身が一度発話したものの、言い直していることが確認できる。

11. そ、うーでも、その（連体詞）時マミ（マリ）は家で、んー寝ていると寝ているん、ですね (CCH18-ST2)
12. だーしかしマリは、あー寝ていると、寝ている時ぜんぜん聞こえません (CCM42-ST2)
13. うーんケンと、あ二人は、地図を、見ているとん見ているうちに、その（連体詞）家の、犬は、バスケットー（バスケット）の中、あ中へ入れました（いれました）(CCM41-ST1)

発話を訂正して言い直したということは、当該学習者はこの発話が不自然であると直感的に感じたことが伺える。

つまり、学習者の中間言語（inter language）において、「テイル形+と」は不自然だと考えられている可能性がある。その理由について、考察するためには、学習者が「テイル形+と」の代わりにどのような形式を使っているかを明らかにする必要がある。この点については 4.2 で詳説するが、中国語 L1 日本語学習者は、「テイル形+時」の形式を半ば固定フレーズとして使用している傾向がある。望月等（2020）では、ストーリーライティングにおける同様の傾向が指摘されていたが、ストーリーテリングにおいてもこの傾向は依然として存在していることがわかる。

中国語では類似の形式として、「在 V 的時候」ないし「在 V 時」の形式があり、直感的には「テイル形+時」と対応することが伺える。

即ち、中国語 L1 日本語学習者の中間言語の中では、中国語から類推しやすい「テイル形+時」が正しいと直感的に感じられる一方、明確な対応形式がない「テイル形+と」については違和感を覚えている可能性がある。だからこそ、単に過少使用しているだけでなく、いったん「テイル形+と」を発話しても、言い間違え

たと感じて撤回し、言い直すという行動に出るのではないだろうか。

①中国語に直感的に対応する「テイル形+時」の形式が違和感なく使えるため、「テイル形+と」を使う動機がない。

②中国語に直感的に対応する形式がない「テイル形+と」は違和感を生じさせるため、発話しても訂正しようとする。

学習者の心理内では、上述のような心理作用が働いている可能性があり、これは母語の転移の一種と言うこともできる。

4.3. 「テイル形+時空間を表す語句」の使用

日本語母語話者のテイル形産出においては、「テイル形+何らかの時空間を表す語句」のコロケーションによって、場面を指示するような用法が多く見受けられる。具体的に言えば、「テイル+時」「テイル+間」「テイル+ところ」「テイル+うち」の4種類である。

14. えー、ピクニックに行くためにまあ二人が、地図を、見て話し合っている時に、飼っている犬が、あ、勝手に、バックへあ、サンドイッチが入っている(はいっている)ババケットへ入って(はいって)しまいました(JJJ04-ST1)

15. 地図を見て、どこへ行こうかと話している間に、バケットの中に、子犬が、入りました(JJJ07-ST1)

16. ケンは物置から梯子を取り出して、2階の空いている窓から入ろうとしているところ、パトロール中の警官に見つかり、注意されました。(JJJ12-SW2)

17. 二人が地図を見ているうちに、バケットに犬がもぐりこんでしまいました。(JJJ45-SW1)

上記4例を見ると、いずれも「テイル形+時空間を表す語句」のフレーズで、発話の場面を規定し、後続の事象の背景を描写するという点で、前説の「テイル形+と」と近いと言える。

I-JASにおけるこの形式の産出状況は、日本語母語話者であれば、ストーリーテリングではそれぞれ、「テイル形+時」が4例、「テイル形+間」が13例、「テイル形+ところ」が5例、「テイル形+うち」が1例である。「テイル形+間」が最も多用されているものの、4種類がある程度のヴァリエティを持って使用されていることが伺える。

ストーリーライティングでは、「テイル形+時」が0例、「テイル形+間」が16例、「テイル形+ところ」が3例、「テイル形+うち」が2例である。ライティングタスク(即ち、スピーキングタスクに比べると、ある程度の書面的な色彩を持つタスク)においては、日本語母語話者は「テイル+時」を使っておらず、「テイル+間」を中心的に使用していることが見て取れる。

中国語L1日本語学習者も、この種の「テイル+時空間を表す語句」という形式を一切使用しないわけではない。上記の4種の語句はすべて使用例がある。ただし、日本語母語話者に比べると、使用頻度の高い語に偏りが見られる。「テイル+時」を優先して使用する傾向にあるのである。以下、表に示す。

table 14 ストーリーテリングにおける中国語L1日本語学習者の「テイル+時空間を表す語句」の使用

	時	間	ところ	うち
CCH	20	3	0	0
CCM	13	0	1	6
CCS	16	2	0	4
CCT	7	4	1	1
JJC	5	2	2	2

ストーリーテリングでは、中国語 L1 日本語学習者は、中国教室環境・台湾教室環境・日本国内環境の全てのグループにおいて、「テイル+時」が最も多い。日本語母語話者の中でも最も多く使われていた「テイル+間」の形式は、どのグループでも「テイル+時」以下の出現頻度である。

以下、ストーリーテリング 1, 2 コマ目の描写を例に実際の使用例を検討する。ピクニックを控えたケンとマリが地図を見ている間に、飼い犬がバスケットに潜り込んでしまう情景である。

18. んー、かん（ケン）、ケンとマリが地図を見ている時、犬がバスケットに、あー、入りました（CCH20-ST1）
19. その（連体詞）時、ケンとマリは地図を見ている時、子犬がーバスケット（バスケット）を入れてー、そしてーケンとマリはその（連体詞）ままバスケット（バスケット）を持ってーピクニックをー、行ってしまった（CCM01-ST1）
20. そしてケンとマリをええと今日のピクニックの目的地の地図を見ている時ええと、犬はその（連体詞）バスケットに入ってしまった（CCS01-ST1）
21. そして、マリと、ケンは、えっと地図をみている時、犬はバスケット（バスケット）に入りました（CCS03-ST1）
22. ああ、そして、ケンとマリ、ケンとマリが地図を見ているとこ、ああ、見ている時、犬がこっそり、バスケ、バスケットに、ああ、はい、はいりこ、入り込みました（CCS26-ST1）

ストーリーテリング 1 のタスクにおける、2 コマ目の描写である。「ケンとマリが地図を見ている時」、という書き方が目立つ。例文 23 では、一度「見ている

ところ」を選択しかけて、言いよどんだのちに「見ている時」を選択しなおしている。当該学習者にとって、「見ている時」がより違和感の少ない形式だったことが伺える。

日本語母語話者であっても、「テイル形+時」を使用しているものもある。

23. そしてケン、とマリが、えーと地図、でどこに行くか見ている時に、えーとケンとマリが飼っていると思われる犬が、えーとバスケットの中に入ってしまった（JJJ28-ST1）

しかしながら、このような書き出し（発話）をしているのは 50 例中 3 例だけであり、他の 47 例では「テイル形+間」を中心に、別の書き出しが用いられている。

24. えーとケンとマリが、地図を見ている間に、バスケットの中に犬が入ってしまいました（JJJ03-ST1）
25. ケンとマリが地図を見て、えピクニックの計画をしている間に犬がバスケットの中に潜りこんでいました（JJJ18-ST1）

「テイル形+間」を使用した書き出しが 16 例を数える一方、日本語母語話者はより多様な形式を選択する。

26. ケンとマリは、地図を見ていると、犬がバスケットの中に入って（はいって）きました（JJJ14-ST1）
27. その（連体詞）時、えーケンとマリは犬を飼っているわけですが、えー、その（連体詞）犬が、何と（なんと）、えピクニックに持っていく、えーサンドイッチ、のいやーピクニックに持っていくバスケットの中に入り込んでしまいましたその間（そのかん）えーマリとケンはえ地図を

えーゆ眺めて、えーピクニックのえ場所確認していたがため、えー、その（連体詞）様子をえー知りませんでした（JJJ05-ST1）

28. え出かける前に二人が、えー地図を見ていると、その（連体詞）間（あいだ）に、犬が、バスケットの、中に入ってしまった（JJJ01-ST1）

日本語母語話者は「テイル形+間」を選択するものが多く、その他「テイル形+と」「その間（かん）」など多様な形式を使用している。それに対して、中国語 L1 日本語学習者は、「テイル形+時」を選択する傾向が強いことがわかる。

table 15 ストーリーライティングにおける中国語 L1 日本語学習者の「テイル+時空間を表す語句」の使用

	時	間	ところ	うち
CCH	10	2	0	2
CCM	9	0	2	8
CCS	16	5	1	8
CCT	6	5	2	4
JJC	9	8	4	3

ストーリーライティングのタスクにおいても、中国語 L1 日本語学習者は「テイル形+時」を最も多く使用していることがわかる。CCT, JJC においては「テイル形+間」の形式と拮抗しているものの、日本語母語話者がライティングタスクにおいて「テイル形+時」を使用しなかったことから考えると、大きな差異があると言えるだろう。以下、実際の使用例を検討してみたい。

日本語母語話者は、「テイル形+時」を使わず、「テイル形+間」や、より多様な時空間を表す語句を産出した。

29. マリとケンが地図を見ている間に、犬はバスケットの中に入ってしまった。（JJJ11-SW1）

30. けんとまりが地図を見てどこに行こうかと話している隙に子犬がバスケットの中に入り込んでしまいました。（JJJ07-SW1）

31. ケンとマリは、ピクニックの場所がわからず地図で探しています。その間に犬がサンドイッチが入ったバスケットの中に入り込んでしまいました。（JJJ15-SW1）

一方で、中国語 L1 日本語学習者は、「テイル形+時」を使用する傾向が強い。

32. ケンとマリは地図を見ているとき、家の犬はバスケットに飛びこんでしまいました（CCH02-SW1）

33. 彼らは地図を見ているときに犬がバスケットに入りました。（CCM31-SW1）

ただし、ストーリーテリングに比べると、ストーリーライティングではより多様な表現が使われている。

34. 地図を見て、どこに行くのがいいですかと相談している（している）うちに、犬はピクニックのバスケットに入りました。（CCM32-SW1）

35. 二人はハイキングに行くことにしたから、地図を見ていました。その時、家の犬はバスケットに入りました。（CCM10-SW1）

なぜ中国語 L1 日本語学習者が「テイル+時」を多用するのかについては、「純粋な学習レベル」「母語の転移」の双方が考えられる。中国語では、ある事象の起こる背景について、「A 的時侯（A の時に）」という

フレーズを用いることができる。一方で、「ている間」「ているところ」「ている内」のような表現には、直感的に対応するものがない。中国語の“之間（の間）”は、ある事象と事象の中間の事物を表すことができるが、複文の形で後続事象の背景を叙述することには使にくい。“的地方”，“之處”（のところ）や“裡（内側に）”は、物理的な位置関係を表し、日本語とは対応しない。

望月等（2020）でも、テイタ形について類似の指摘がなされており、日本語を介さない中国語母語話者に、中国語で I-JAS のストーリーライティングをさせた結果が掲載されている。

36. a. お昼の時間になり、朝二人で準備したサンドイッチを食べようと、バスケットを開けたところ、(JJJ05-SW1-00040-K)
b. 当他们找好了野餐的地点，打开野餐篮，正准备好好享受美味的野餐时，(p. 126)

日本語母語話者が「ところ」を使用する箇所に、中国語では“時”が使用されていることが見て取れる。ここに、母語の転移の可能性が現れる。

むろん、このような単純な対応関係だけからの分析は一面的であり、安易に利用するのは危険だとも言える。しかしながら、「直感的に対応する形式があるかどうか」が産出に影響を与える可能性については議論の余地がある。

5. 結論

5.1. 結論

本稿では、I-JAS における日本語母語話者と中国語 L1 日本語学習者のテイル形産出について、ストーリーテリングとストーリーライティングというマルチモーダルなタスクを比較した。その結果、いずれもテイル形の産出頻度自体が（短縮形「てる」を併せ）、日本語母語話者の方が高いことが確認された。この傾向は、学習者が中国・台湾いずれの教室で学習したにせよ、

日本国内で学習しているにせよ変化がないことが確認された。

個別の例文を検討すると、テイル形を用いた発話場面の説明描写について、日本語母語話者と中国語 L1 日本語学習者では差が見られた。

結果状態を表すテイル形に関して、日本語母語話者と中国語 L1 日本語学習者では、動作継続用法との使用の割合では大差がない。しかしながら、「開いている」の使用には大きな差が見られた。

テイル形を用いた接続表現について、望月等（2020）において指摘されていた、ストーリーライティングにおける接続表現の差異について、ストーリーテリングでも同様の現象が確認された。即ち、ストーリーテリングにおいても、日本語母語話者は「テイル形+と」「テイル形+時」「テイル形+間」「テイル形+ところ」「テイル形+うち」といった多様な表現を使うのに対し、中国語 L1 日本語学習者は「テイル形+時」を中心に使用し、他の形式の産出頻度が少ないことが明らかになった。ストーリーテリングにおいては、一度別の表現を使っても、「時」と言い直す訂正行動が見受けられた。

原因については、「テイル形+時」の場合は中国語に“的時候”という直感的にわかりやすく対応した表現があるのに対して、その他の形式にはないことが考えられる。

5.2. 今後の課題

5.2.1. 他の言語を母語とする日本語学習者との比較

本稿では、中国語を母語とする日本語学習者に絞って検討を行った。本稿では中国語の転移を示唆する結果であると考察したものの、仮に、他の言語の母語話者も中国語 L1 日本語学習者と同じ産出傾向がある場合には、母語の転移の可能性は薄まり、教え方の問題や、より普遍的な習得困難点の存在が示唆される。そのため、I-JAS における他の言語の母語話者の産出した日本語の検討が今後の課題となるだろう。

5.2.2. 日本語教育への応用

仮に中国語の母語の転移が使用傾向に影響していると考え、**「テイル+と」「テイル+間」**のような形式が習得困難点であることは、学習者文法 (Pedagogical Grammar) の確立において示唆的である。動作の結果

状態の表現や、何らかの事象の発生する場面を説明する表現が、日本語と中国語で異なっていることを指摘することで、中国語 L1 日本語学習者に特化した文法教育の体系を補完することができる可能性がある。より厳密な対照言語学的分析を加えたうえで、実際の教授に活かせるモデルを作ることを今後の課題とする。

参考文献

- 沈家煊. 1995. <“有界”与“无界”>. 《中国语文》5, ページ: 163-190.
- Li, Ping and Shirai, Yasuhiro. 2000. *The acquisition of lexical and grammatical aspect*. Berlin, New York : Mouton de Gruyter.
- Sugaya, N and Shirai, Y. 2007. The acquisition of progressive and resultative meanings of the imperfective aspect marker by L2 Learners of Japanese: Transfer, universals, or multiple factors? *Studies in Second Language Acquisition*29, pp. 1-38.
- 孫猛, 小泉政利, 玉岡賀津雄. 2010. 「第二言語としての「テイル」の習得における語彙・文法能力の役割」. 『東北大学言語学論集』19, ページ: 47-59.
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味第二巻』. くろしお出版.
- 峯布由紀. 2019. 「文脈の時間の流れを表すテイル (ル) の習得について—日本語の発達段階における位置づけ—」. 『日本語教育』173, ページ: 61-68.
- . 2015. 『第二言語としての日本語の発達過程 - 言語と思考の Processability』. ココ出版.
- 工藤真由美. 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト: 現代日本語の時間の表現』. ひつじ書房.
- 望月圭子, 申亜敏, 小柳昇. 2020. 「日本語・英語・中国語双方向学習者コーパスにみられるテンス・アスペクトの習得」. 『日本語・日本学研究』, ページ: 137-152.
- 石毓智. 1992. <论现代汉语的“体”范畴>, 《中国社会科学》6, ページ: 183-201.
- 迫田久美子, 小西円, 佐々木藍子, 須賀和香子, 細井陽子. 2016. 「多言語母語の日本語学習者 横断コーパス」. 『国語研プロジェクトレビュー』. ページ: 93-110.
- 金田一春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」. 『日本語動詞のアスペクト』. 麦書房. 1970, ページ: 7-26.